

日使頭祭

平成30年4月7日(土)

4月7日(土)、京都・大山崎の油祖離宮八幡宮において恒例の日使頭祭が行なわれた。当日はメーカー、販売業者、関係団体の代表者ら油脂業界から100余名が出席。また総代会、地元関係者も多数出席し、油脂業界のさらなる繁栄や参拝者の無病息災を祈願した。

本年の日使頭(ひのかしら)は一般社団法人日本植物油協会の今村隆郎会長(日清オイリオグループ(株)会長)が務められ、午前11時開式、献燈や湯立、祝詞奏上、玉串奉奠などの伝統神事後、次のように挨拶された。

「今日は寒い中ご参列を頂き、日使頭祭は無事、厳粛に終了したことにお祝と、感謝を申し上げます。私も昨年に引き続き日使頭ということで、この袴を着ますと、身も心も引き締まる思いがします。この日使頭祭は非常に長い歴史を持つ油の神様を祝う行事である。その中心となるこの油祖離宮八幡宮は貞観元年(西暦859年)にこの山崎の地に御神体が祭られ、翌860年に神社が創建されたと聞いている。その後、幾多の試練を乗り越えて今日まで悠久の歴史を刻んでいる。この日使頭祭の歴史は古文書によると、川向うの男山にある岩清水八幡宮に勅使が渡る儀式を模したものだと言われている。その後、観元年間に一人の神官が荏胡麻の作業技術を開発した。この個人に倣って、この離宮八幡宮が日本の油脂産業の基礎を築いた油の神様として、私ども油脂関係者は長年に亘り信仰の念を捧げてきた。この山崎の地は、桂川・木津川・宇治川の三つの川が合流する水上交通の要となる地域である。それ以外にも京都と大阪の境に位置する所であり背後には、天王山が控えており昔から要綱の地として栄えてきた地域である。このような地の利も含めて山崎で油が発展したのは、時の朝廷や幕府が手厚く保護し、特権を与えた事がある。これにより離宮八幡宮の油は、山崎の油という名声が油の利用と共に一気に全国に広がっていったと云うことである。このような油の発祥の地として輝かしい油の歴史を語り継ぎ、油脂産業のご加護をお願いする意味で、製油業界と油問屋が一緒になって崇敬会と云う親睦会が発足した。この日使頭祭は毎年この日に油の価値を再認識し、そしてこの価値にふさわしい業界になる様に、一丸となって努力していくことを誓う日と認識している。昨年は日本に2,869万人が訪日し、京都にも700万人が訪れた。この観光客の目的の一つが和食、天ぷらを食べることと言われている。山崎の地で生まれた食用油が今や多様化している。美味しさや品質、技術面でも発展し、海外でも食されるようになった。私ども製油産業を取り巻く環境はまだまだ厳しい物があるが日本の食文化の一つである油を後世に伝えるためにもさらに努力していきたい。」と語り挨拶を締め括った。

この後は、社務所内に場所を移し「直会」が開かれた。一般社団法人日本植物油協会 齊藤昭専務理事の司会進行の下、はじめに崇敬会副会長の(株)マルキチ 木村治愛会長が挨拶。引き続き、日本植物油協会会長会社を代表して日清オイリオグループ(株)大阪支店日朝真人次長が「我々食

用油業界も荳胡麻油を中心としてオリーブ油、米油、アマニ油と云う形で、健康面で食用油の盛り上がりを見せている是非、この貴重な食油を通じて健康維持向上に努めさせていただく事も我々の目的である。貴重な食用油を大切にうって行きながら更に盛り上げていきたい」と強調した。直会は全油販連 宇田川公喜会長の乾杯の音頭で懇談会に入り、関西油脂連合会 木村顕治会長による油締めで散会した。

今年は京都造形芸術大学のアートフェスタが同時開催となり、恒例の屋台には関西油脂連合会や地元の「えごまクラブ」「福社会」などが出店してお祭りを盛り上げた。



えごまクラブによる「長木」の復元品



湯立神事



今村日使頭の挨拶



離宮八幡宮宮司の挨拶



木村崇敬会副会長の直会挨拶

(写真提供 油脂特報社)